

[シンポジウム4]

北里柴三郎を北里柴三郎たらしめているもの
研究、人材、そして「私立」

都倉 武之

慶應義塾福澤研究センター

北里柴三郎(1852-1931)はいうまでもなく、こんにち「日本の細菌学の父」と称され、医学研究の発展に輝かしい足跡を残した人である。ドイツのローベルト・コッホのもとでの破傷風菌の純培養成功(1889年)を端緒として、その血清療法の発見(1890年)や、香港でのペスト菌の発見(1894年)などは世界的によく知られるところである。しかし北里が今日の医学界に残したのはそれだけではない。

まず、人材を育成し学問を次代に繋いだという教育者としての側面である。北里研究所や慶應医学部、日本医師会の要職で北里の後を継いだ北島多一(1870-1956)、赤痢菌を発見した志賀潔(1871-1957)、梅毒特效薬サルヴァルサンを開発した秦佐八郎(1873-1938)、ツツガムシや寄生虫研究で知られる宮島幹之助(1872-1944)の4人は特に北里四天王と呼ばれるが、北里は後進を激励し率いていく巨大な推進力となった。そこには北里の人間的魅力もまた作用したことであろう。

さらに、自身が熊本医学校、次いで東京医学校(現東大医学部)出身という官の学問系譜を引きながら、いわゆる「大学派」との不和を契機として、従前より大学派とは違う動きをしてきた人々、すなわち内務省衛生局や海軍、私立学校の関係者などを結集する核となり、東京帝国大学を中心とした医学教育研究行政の一元的推進に対する刺衝となっていった。そうして1892年に実現するのが私立として出発する伝染病研究所の創立であり、さらに1899年の内務省移管であった。1914年の文部省移管に伴い全職員による連袂辞職と北里研究所創立に至るのもこのためであり、これに加えて、1917年私立初の医科大学としての慶應義塾大学医学部(開設時は大学部医学科)創設に尽力し初代学部長に就任する。この時結集したスタッフは北里門下生のほか、京都帝国大学に連なる経歴を持つ人々であったし、基礎研究と臨床診療の統一の試みや、開業医との連携構想(1916年に大日本医師会会長に就任している)、さらにアメリカ医学の重視など、その姿勢は「官立の医学に対抗して私学としての医学を発達せしむる」(開学時の北里挨拶、『三田評論』262号、1919年5月)という視座で徹底していた。

北里には、コッホの元で成し遂げた、誰もが否定し得ない世界的成果が出発点として存在した。これが、大学派とは別の勢力が結集することを否定し得ないものとし、またそれを継承する人材の裾野がその勢力を持続させたのである。

ただし、北里一人の出現をもって北里は今日の北里たり得ず、そこに数々の協力者、中でも福沢諭吉という仕掛け人を得たことが幸運であったことも疑いのない事実である。土地建物の準備から将来にわたる研究費の継続的創出の配慮まで行き届いたケアを買って出た福沢から受け継いだ「私立」という視座が、今日北里が北里たる足跡を残し得たといえるのではないだろうか。

本報告では、北里を北里たらしめたものは何であるかを考えてみたい。